山とスポーツクライミング情報誌

登山月報

JMSCA 登山月報　第676号　令和７年７月15日発行

関西クライマーの聖地「雪彦山」

- 会長就任挨拶　会長　町田 幸男 …… 2
- Next Generation Cup 2025 in Ryuoh …… 3
  わたSHIGA輝く国スポSC競技リハーサル大会 開催報告
- 第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会（BYC2025）開催報告 … 4
- 第61回海外登山技術研究会2025埼玉県開催＆ …… 6
  令和７年度全国国際委員ミーティング報告
- 港区立高松中学校ボルダリングウォール完成記念セレモニー＆体験会 … 8
- 2025年度山岳レスキュー講習会（無積雪期・西部地区）報告 …… 9
- 令和7年度全国指導委員長会議及びスポーツクライミング代表者連絡会議（SC合同）報告 … 10
- Enjoy Climbing …… 11
- 栃木県山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員会のSDGsな活動 … 12
- JMSCA、寄贈図書、表紙のことば …… 13

No.676

会長就任挨拶

会長　町田 幸男

2025年6月22日（日）第14代会長に就任いたしました町田幸男で御座います。就任に際し所信、ビジョンをお話しいたします。

【組織力の強化】

JMSCAは総務、登山、スポーツクライミング（SC）の３つの部会と独立委員会で成り立っています。組織強化に向け、業務執行理事に総務部を管轄する望月啓治専務理事、登山部長に廣川健太郎副会長、SC部長に畑中渉副会長、事務局に赤尾浩一事務局長（再任）をおきました。JMSCA全体を掌握したマーケティングを実現させるため小田部拓常務理事を起用致しました。副会長は登山、SC部長を兼任し、組織のスリム化と業務の効率化を図ります。それぞれの委員会には担当理事を７月までに配置し、活動、運営について監督してまいります。

理事の皆様の在り方は大変重要です。担当する委員会のみならずJMSCA全体を常に俯瞰し、意見具申をお願いします。理事会はJMSCAの意思決定機関です。

【事務局、委員会の再確認】

各委員会についてはその在り方について改めて考えます。まずは組織管理運営規程を見直します。委員会が増えれば管理費や活動費が増え、財政にも影響します。今の委員会はJMSCAに必要なのか、機能を果たしているのかなど議論が必要です。現状の活動踏襲ではなく、あるべき姿はどうか、５年10年先を見据えたビジョンを掲げるべく議論をお願いします。必要によっては委員会の統廃合も考えなければなりません。組織のスリム化はフットワークを向上させ、財政基盤の向上にもつながります。組織管理運営規程については９月末までに内容を見直し、10月の理事会で改定する予定です。

要となる事務局の現状を見ますと常に多忙を極めています。ここ数ヶ月望月専務と現状を整理してみました。事務局の仕事は多義にわたりますが、その分掌が不明確な部分があります。誰が何を担当し、どのマニュアルに沿って業務を遂行すればよいのかよく見えません。これは今まで各事務局員のスキルに頼って業務を回してきた結果かと思います。また、各委員会との仕事のシェアが不明確です。JOCや外部組織とのやり取りなど、専門委員会でなければ分からない部分も多く、事務局員が苦慮している部分も見受けられます。電話対応にも多くの時間を割いているようです。事務局員の適正な工数配分など、改善については望月専務を中心に早急に行います。

【財政再建】

財政再建については６月の総会で計画を提示いたしました。正味財産の適正化に向けて収入源の確保と支出削減の見える化を実施しなければなりません。計画の詳細は加盟団体の皆様に既にご報告いたしましたのでご参照ください。自己財源である共済会の加入促進は加速しなければなりません。クラウドファンディングによる収入確保も強化します。支出については事務局費の削減と競技会の支出改善を引き続き実行していきます。予算については状況を常に監視し、補正を掛けていきます。任期の２年間で皆様にご協力いただいた基金の返済を目標といたします。

【登山とスポーツクライミング】

登山での課題はトイレやアクセス問題、自然環境保全など多義にわたります。昨年度は減少に転じた遭難件数ですが今だ2946件で遭難者数は3357人です。2019年、私が遭対委員長時代に掲げたストップ・ザ1000、その活動効果は今だに見えてまいりません。登山者への安全登山の指導は喫緊の課題と言えます。正しい登山者の育成が減遭難への近道と考えます。

SC競技については年間８の競技会を開催しています。赤字の根源と言われてきた競技ですが昨年度は黒字化に成功しました。強化にあってはワールドカップで目覚ましい成果を上げ、ロス５輪でのメダル獲得に向けて着実に力を付けています。しかしながらSCの知名度はまだまだ高くはありません。SNSの発信も強化しなければなりません。まずは底辺の拡大を目指した普及に注力し、未来のオリンピアンを育てていきます。国スポでは後催県をフォローし疲弊する地方岳連へ手を差し伸べていきます。また、行政への指導も徹底し、正しい大会を実現いたします。

【おわりに】

今までのJMSCAは内向きの活動が主でした。これからは外部への活動を心掛け、誰もが知る、頼れるJMSCAにして行かなければなりません。組織は人です。理事の皆様が力を合わせ、脳みそに汗をかきながら期待に添える様、頑張りましょう。常にスピード感を持った行動をお願いします。

最後になりますが、いつもご支援いただいているスポンサーの皆様、都道府県山岳連盟・協会の皆様、未熟者ではございますが、変わらぬご支援。ご鞭撻の程、宜しくお願い申し上げます。

Next Generation Cup 2025 in Ryuoh

わたSHIGA輝く国スポSC競技リハーサル大会

開催報告　　国スポ委員長　原　勇人

2025年6月7日（土）～8日（日）、滋賀県竜王町にある「竜王町総合運動公園スポーツクライミング特設会場（ドラゴンハット）」において、「Next Generation Cup 2025 in Ryuoh」が初開催されました。本大会は、小学6年生から中学2年生までの男女を対象に、将来のスポーツクライミング競技を担う“次世代”の育成と競技機会の提供を目的として開催されたものです。

競技は男子の部・女子の部に分かれ、それぞれ2名1チームで構成されるチーム戦として実施しました。男子10チーム（計20名）、女子15チーム（計30名）、あわせて25チーム 計50名が全国からエントリーし、2日間にわたって熱戦を繰り広げました。

競技種目はリード競技とボルダー競技の2種目。リード競技では、予選ラウンドとして2本のルートにフラッシング形式で挑戦し、チーム順位ポイントにより上位8チームが決勝へ進出。決勝はオンサイト形式で行われ、予選同様にチーム順位ポイントが少ないチームが上位となります。選手たちはルートの読みやクライミングの戦略など、チーム内での作戦会議で綿密に打合せ、ルート上で知恵を絞り、懸命な登りを披露し、息をのむ接戦を展開しました。一方ボルダー競技では、予選・決勝ともに4課題が設定され、各課題25ポイントの配点で合計得点によってチーム順位を競いました。ホールドの保持力やムーブの正確性、時間内での対応力など、多様な能力が求められる構成となり、各チームの特長が如実に表れる結果となりました。

リード

ボルダー

その他の成績については、以下の公式掲示板のＵＲＬまたはＱＲコードでご参照ください。

https://jmanew.sakura.ne.jp/climbing/temp_results/kokutai/pub/shiga_reh/

会場となったドラゴンハットは、全天候型のドーム屋根を備えた国内有数のスポーツ施設であり、クライミング競技にも非常に適した環境が整っています。

今回の大会のために設置された特設のリードウォール（高さ15ｍ、幅12ｍ）と、2基のボルダーウォール（高さ4.7ｍ、幅10ｍ）は、競技の安全性と公平性を担保するとともに、観戦者にとっても見応えのある演出を可能にしました。

本大会は、「Next Generation Cup」として初の開催となりましたが、今後の継続的な開催への期待が高まる非常に意義深い機会となりました。競技を通じて、参加選手たちは技術力のみならず、チームワークや勝負への向き合い方など、次世代アスリートとしての大切な要素を学びました。

また、運営においては、リハーサル大会の位置づけとして、会場設営・進行体制・競技ルールの運用についても重要な検証が行われ、2025年10月3日から5日の3日間開催される本大会に向けた貴重な知見と改善点が得られました。

今後も、地域と連携し次世代を育成する大会の開催を通じて、スポーツクライミングの発展と未来のトップクライマー育成に貢献する大会にして参ります。

総合成績　男子の部

順位	チーム名	選手名	選手名
1位	TK climb LINK ～東西の絆～	橋爪　健太	上田　大志
2位	Join Forces	額賀　悠斗	宮川　　浬
3位	桃太郎 clim bers	江見　昇真	田中　　昴

総合成績　女子の部

順位	チーム名	選手名	選手名
1位	いちなな	海野　奈花	濱松いちか
2位	ハルサク	長島　永和	小川さくら
3位	チーム AICHI	長谷　美咲	柴田　　楓

第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会（BYC2025）開催報告

「第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会（BYC2025）」が鳥取県倉吉市の鳥取県立倉吉体育文化会館で開催された。本大会は2015年に同地で初開催されて以来、全11回のうち９回がこの会場で実施されており、ユース選手のボルダー種目の〝聖地〟に２年ぶりに帰ってくることとなった。

ボルダー種目はワールドカップでも日本代表チームが世界ランキング１位を10年守り続けている（本大会開催時点）種目であり、日本の選手層の厚さは他国を圧倒している。本大会は今後も引き続き日本が世界を牽引し続けることができるかを占う重要な大会であり、日本全国から有望なユースクライマーが集まり凌ぎを削る、見応えのある大会となることが期待された。

■開催概要

第11回ボルダーユース日本選手権倉吉大会（BYC2025）

期　　日　2025年５月31日（土）～６月１日（日）

参加選手数　239名

（U-19男子：58名、U19女子：40名、U17男子：78名、U17女子：63名）

会　　場　鳥取県立倉吉体育文化会館

来場者数　予選 約720名、決勝 約410名

※選手、スタッフ、メディア、VIPなど含む

■競技　BYC2025 競技結果

男子

順位	氏名	所属	成績(決勝)
U-19			
1	佐々木玲偉	福島県山岳・スポーツクライミング連盟	59.7
2	山田　航大	埼玉県山岳・スポーツクライミング協会	59.4
3	長森　　晴	N高等学校	44.8
U-17			
1	小山　楚嵐	三重県山岳・スポーツクライミング連盟	58.9
2	濱田　琉誠	神奈川県山岳連盟	44.6
3	小西　充晃	熊本県山岳・スポーツクライミング連盟	44.6

女子

順位	氏名	所属	成績(決勝)
U-19			
1	村越　佳歩	茨城県山岳連盟	74.5
2	山　真奈実	三重県山岳・スポーツクライミング連盟	59.6
3	山根　嘉穂	茨城県山岳連盟	59.5
U-17			
1	齋藤紗里衣	栃木県山岳・スポーツクライミング連盟	44.5
2	松浦　朱希	東京都山岳連盟	43.9
3	中村まりん	茨城県山岳連盟	34.9

本大会では国際スポーツクライミング連盟（IFSC）によるルール変更に伴い、いくつかのルール変更がおこなわれた。

１：年齢別カテゴリー編成の変更

２：成績のポイント制の導入

３：決勝進出者数及び競技進行の変更

いずれもボルダージャパンカップや他のユース選手権でも実施されているため詳細は割愛するが、ボルダーユース日本選手権では男女同時での決勝となるため、最大４選手が同時に競技することとなる。このため、各課題への注目が分散し、進行が散漫になる懸念もあったが、一方でスピーディーな展開によって会場の熱気が持続し、盛り上がりが途切れないという効果も見られた。今大会においては、むしろその「良い面」が際立っていたという印象を受けた。

【U17】

女子は２課題目まで完登が出ない緊迫した雰囲気で競技が進み、最後まで僅差のまま第３課題を迎えた。最終課題はTOPへのシークエンスが読みにくい課題で、対応力の差が勝敗を分け、予選を７位で通過した齋藤紗里依が、予選首位通過の松浦朱希を僅差で抑え初優勝を決めた。

男子は１課題目で４人が完登するものの、この世代では昨年世界ユース選手権で金メダルを獲得した濱田琉誠が完登を逃す予想外の展開で幕をあけた。完登が出なかった２課題目を終え、最終課題は競技壁を大きく使った横方向へのコーディネーション課題。多くの選手が苦戦する中、小山楚嵐が完登すると場内は大歓声に包まれ、自身初の表彰台を優勝で飾った。その後、濱田も完登を決め２位をもぎ取る結果となった。

【U19】

女子は２課題を終え、予選を２位タイで通過した、村越佳歩、山真奈実、山根嘉穂の３選手が両課題を完登し最終課題での争いとなった。最初にトライした村越が完登を決め残りの２選手のトライ次第という展開となったが、両者ともに僅かなところで完登を逃し、唯一の全完登で村越が２年ぶりの優勝となった。

男子も２課題目終了時点で６人が僅差で並ぶ展開。最終課題は強傾斜でフィジカルが求められる課題であったが、佐々木玲偉、山田航大、長森晴の３選手が

U-19男子　入賞選手

U-19女子　入賞選手

U-17男子　入賞選手

U-17女子　入賞選手

完登し、トータルのトライ数の差で0.3ptリードした佐々木がリードユース日本選手権で4位だった雪辱を果たし、初優勝を決めた。

■総評

大会は、鳥取県山岳・スポーツクライミング協会が主管のもと開催された。同県では前述の通り、ボルダーユース日本選手権を長く開催してきた実績があり、今回もスムーズかつ安定した大会運営を実現することができた。改めて尽力くださった競技役員の皆様に感謝いたします。

また、リードユース日本選手権同様に近年のユース選手権では見送られていた、予選のYouTubeライブ配信を実験的に実施した。遠隔操作で画角などを調整できる中継カメラを会場に配置することで、競技の進行や演出をしながら最小人員での中継を実現できた。現時点での予選の再生回数は決勝のそれを超えており、ユース大会での予選中継のニーズを再確認することができた。最後に、本大会の開催にあたり尽力をいただいた、全ての関係者の皆様にお礼申し上げます。

副実行委員長　藤枝 隆介

佐々木玲偉

小山楚嵐

齋藤紗里衣

村越佳歩

写真　PHOTO：Ryo Kubota/JMSCA/アフロ

第61回海外登山技術研究会2025埼玉県開催&令和7年度全国国際委員ミーティング報告

「ダサイですよー」とある若者から研究会の名称について言われた事がある。まあ61回も続く研究会だから昔風なんですよね。今風に変えた方が良いのかなー？

それはさて置き研究会の前日に全国国際委員ミーティングが行われました。

全国国際委員ミーティング

日時　6月14日（土）17：30 ～ 19：30

会場　埼玉県さいたま市大宮区 ソニックシティ501会議室

最初にJMSCA登山部・野村善弥部長より挨拶をいただく。報告は加藤富之常任委員より令和６年度の事業及び決算報告と令和７年度の事業計画及び予算案があった。続いて各都道府県委員長から活動紹介と情報等交換をしました。参加したのは地元埼玉県、群馬県、長野県、愛知県、京都府、山口県、福井県、千葉県で例年より若干少なめなものの合計20名の参加者だった。

個人的に印象が残った話としては福井県の渋谷好司委員長より福井県山岳連盟所属の山岳会会員１名がガイド登山でネパール・アマダブラム峰に登頂したがクラウドファンディングを利用した事と2023年第59回同研究会（福井県開催）参加の若者が刺激を受けて海外登山を実践するようになった。これには研究会が少しでも海外登山者を増やす事に貢献をしているのだと感じた。

第61回海外登山技術研究会2025

日時　6月15（日）9：20 ～ 16：45

会場　埼玉県さいたま市大宮区ソニックシティ906会議室

最初にJMSCA小野寺斉専務理事から歴史ある「海外登山技術研究会」への期待と励ましの言葉が送られた。

■ 現地でかかるレスキュー費用と保険金額の現状

「天国じじい」としてテレビでお馴染みの貫田宗男（ぬきた むねお）講師は世界中の山や辺境地撮影をコーディネイトし飛び回っている故、現地でのレスキュー状況や保険についても詳しい。今回も南米 ペルー・アルパマヨ峰に出かけており地球の裏側からのオンライン報告となった。

海外登山保険は欧米に較べると日本は非常に遅れている。儲からないからやらないという事もあるが、確かに膨大な請求をされるケースが多い。特に登山者、トレッカー共に多いネパールは比例して事故も多い。同国はヘリコプター救助が多用されていて、性能以上に高高度までフライトをする。プロの操縦士もいて、さらに高額の請求が待っている。また詐欺まがいや本当の保険詐欺事件も起きている。

以下共済や保険などの紹介

○日山協山岳共済　　○労山基金（山岳共済）

○Global Rescue　　○生命保険（ゆうちょ含）など。

とにかくお金が沢山かかります。事故は起こさず気を付けてお出かけ下さい！ との事。

■ パキスタン／カランバール渓谷でのクライミング

〈ボフパリット登山報告〉メンバー２名＋α

鳴海玄希（なるみ げんき）講師は先鋭的でユニークな登山やスキーで知られているクライマーだが、今回程ユニークな登山はかなり珍しい。常識的山登りはアプローチ、登山本番共に良く調べ計画をきちんと立て、装備も万全に…とは真逆であり資料は友人（国際・AC委員長の岩崎氏だが）の撮影した20年前の写真数枚の上、アフガニスタン国境近くで外国人登山者は数十年に１度程度で情報はほとんど無しという行き当たりばったりだったからだ。

案の定渓谷目前で「外国人立入禁止」の看板で振り出しに戻る。それも何とかクリアーし素晴らしい岩稜の登攀に入ったが３日目に降雪・夏山装備で４日目も会心のクライミングをするもボロボロの岩の地帯に突入し、危険過ぎると敗退を判断。しかし楽に思われた北壁の懸垂下降はスノーシャワーの中18ピッチもある厳しいものだった。敗退したとは言え二人とも満足の山旅だったと言う。

尚写真家の鈴木岳美氏が美しく、素晴らしいドローンでの撮影をしており、見たこともない登攀シーンなどなどあるので機会があればぜひ見て欲しい。

■ アラスカ／デナリ（6190ｍ）カシンリッジ

〈The Linked Cassin 登攀報告〉メンバー３名

今回の竹田昴（たけだ すばる）講師はじめメンバー全員が信州大学・北海道大学卒業の20代。そんなフレッシュな若者達が入山前に窮地に陥った！アラスカ入りして直ぐに装備のほとんどを盗難されてしまったのだ。普通ならそこでThe End なところだが、ニュースになり地元やカナダのクライマー達が上から下まで装備を提供してくれたのである。

さて表題にはカシンリッジと有るものの今回のルー

トは地図上で見ないとわからないかも知れないがデナリ南壁手前にそびえるカヒトナピークを経由してカシンリッジに至る長大な尾根なのである。これを11日間攀じ名付けたルート名はThe Linked Casin同ルートを目指し帰らぬ人となった山田＝井上ペアに対する想いや盗難騒動で絶体絶命だった彼らに手を差し伸べて呉れた北米のクライマー達の温かな気持ちを表したものだ。最後に山頂手前で体調を崩した仲間に優しく出来なかった自分を反省しチームワークが大切かつ重要だと語ってくれた。

■ ネパール／チョパバマレ峰（6109ｍ）第２登

〈East ridge tumiki 初登攀報告〉

当委員会の常任委員でもある馬目弘仁（まのめ ひろよし）講師が報告した山はパマリ山群（ロールワリン山群、ガウリサンカール峰の西方、中国との国境付近の小さな山群）で、カトマンズからわずか３日間でベースキャンプに入れるというアプローチの良さだが比較的最近に解禁された山で2019年に初登頂されただけで情報はほとんど無く静かなところである。

こちらもアクシデント！が発生ベースキャンプを設営して間もなく熊が出没してテントは破壊され食料もそこそこ失ってしまったのだ。この時には正直遠征は終わったという感じだったと言うが、色々と議論を経て登山を続行。

メンバー４名のうち３名で11月10日に登攀を開始、４日目に登頂し直ぐに下降開始、５日目の11月14日にベースキャンプ着となった。この山の選定として①冒険的に楽しめそうな地域と山②登山記録が少なくて新ルート開拓の余地がある③約１ヶ月の登山期間④トレッキングパーミッションで登れる（費用が100万円以内）という事でピッタリの山だったようだ。

■ パキスタン／ツイⅡ峰（6523ｍ）西壁

〈Spider`s Thread 初登攀報告〉メンバー３人

鈴木雄大（すずき ゆうだい）講師は2023年,2024年と、いずれもペルーそしてパキスタンと続けて６千ｍ峰の高難度なルートを初登している20才代のホープである。

今回は昨年９月のツイⅡ峰の話に先だち６月のキタラフ峰（6036ｍ）の報告もいただいた。

ペールアンデスは欧米人達がヨーロッパアルプスの延長として多数訪れており、初登のルートを探すというのは、まず考えられないはずなのに南壁から南稜そして南東稜へとつなげた５日間での初登攀を成し遂げた。途中15ｍもの大フォールをやったり、巨大マッシュルームを次々と超えて行くというクレイジーだが素晴らしいクライミングをした。帰国後１ヵ月強でパキスタンに渡り次の目標は表題のツイⅡ峰西壁。高度差1450ｍの高難度の岩壁を３日間で登頂し山頂でビバーク。同ルートを23ピッチ程の懸垂下降、その後クライミングダウンで氷河に降り立ちベースキャンプ着は夜の11時過ぎだった。

■ 国内／冬季のリッジクライミング

富山県在住の和田一真（わだ かずま）講師は自宅から100キロ圏内の山、時に北アルプス、白山と頚城山塊（くびきさんかい）の戸隠周辺の山を紹介してくれた。これらの山々を皆さん知っていますか？… ①笠ヶ岳・穴毛谷第一尾根　②黒部別山・南尾根　③赤沢岳・西尾根南稜第二グラード　④戸隠山・九頭龍山右稜　⑤白山・三方崩山東面…全てご存知ならかなりのツーでしょう！

更にこれらのルートからの継続登攀など色々なコースを紹介頂くが、もはやかなりの難題であった。とてつもないマニアックな話です。

日本の山、とりわけスノーリッジコースも未踏を含めまだまだあるのかと！ 目からウロコだった！

■ トークセッション：リッジクライミング・その難しさと魅力

講師全員にお願いをした。各自５～10分程自分の登山感など語って頂いた後、馬目氏の進行で今回はほとんどがリッジクライミングであったので、その難しさと魅了について話を進めた。利点として落石や雪崩が少ない事、欠点は登りだけでなく下りが多々あったり、とにかく登らないと先もわからないケースもあり、その上真下に下れないので敗退もしにくく、場合によっては山頂まで行かないと下山も出来ないハイリスクを伴なうとの事で登山本来の楽しさになりうるかもと。

登攀技術は道具と共に進化し岩壁を登るのは大昔より容易になったし岩壁はルートを読むのが比較的楽である。今こそ冒険的なリッジクライミングがアルピニズムの原点なのではないだろうかと・・・まとめたいところだが講師の方々は自分達が好きに登れば良いのではとか、リーダーは計画書の中だけでメンバーのコミュニケーションが大切であると、高難度のクライミングをこなすクライマー達が言うのは逆に新鮮であったし、馬目氏は最後にあえてまとめをせず終了した。

閉会は岩崎同委員長の挨拶で締めた。

今回の参加者は一般30名、リモート45名、講師及び役員16名。　　国際･AC委員会常任委員　笹原芳樹

港区立高松中学校
ボルダリングウォール
完成記念セレモニー＆体験会

開催日時：2025年６月８日（日）10:00 ～ 12:00
開催場所：港区立高松中学校内クライミングウォール

2025年６月８日（日）、港区立高松中学校に新設されたクライミングウォールの完成を記念し、オープニングセレモニーおよび地域生徒向けの体験イベントが開催されました。当協会（公益社団法人 日本山岳・スポーツクライミング協会）は、港区教育委員会からの委託を受け、本イベントの運営支援を実施いたしました。

本事業は、港区がスポーツクライミングを通して子どもたちの体力、特に「指の力」の強化を目的に取り組む中で、スポーツクライミングの魅力を地域に広く伝え、施設の積極的な活用を促進するものとして実施されました。

セレモニーには港区および学校関係者25名が招待され、体験イベントには小学校４年生から中学１年生までの生徒約45名が参加しました（予定60名中、欠席者15名）。保護者を含め、当日の来場者は約100名にのぼりました。当初、参加枠は30名を予定していましたが、募集初日に定員を超える応募があり、急きょ募集枠を拡大するほどの人気イベントとなりました。

特別ゲストとして東京2020オリンピック銅メダリストの野口啓代氏をお招きし、トークショーおよび体験会の講師を務めていただきました。トークショーでは、クライミングを始めたきっかけやその魅力について語られ、参加した子どもたちは熱心に耳を傾けていました。体験会では、野口氏が一人ひとりに優しく丁寧なアドバイスを行い、参加者は何度も果敢に挑戦していました。

また、東京都山岳連盟所属のユース選手が補助スタッフとして参加し、参加者と年齢の近いロールモデルの存在が、子どもたちにとって良い刺激となりました。体験回数は延べ約120セッションに達し、「楽しかった」「安全に楽しめた」といった声が多数寄せられ、施設活用への期待が高まりました。

なお、公的事業における式典業務を当協会が事業として請け負うことは、今回が初めての試みとなりました。しかしながら、大会運営経験の豊富な経験を有する藤枝競技委員会副委員長にディレクションを依頼したことで、円滑な対応が可能となりました。

本業務は４月末に受託が決定し、非常に限られた準備期間の中での実施となりましたが、藤枝氏は多数のJMSCA主催大会を受け持つ多忙な中でも、４月から５月にかけて複数回の事前打ち合わせやリハーサルを行い、台本作成・備品手配・保険加入・指導方法の確認など、万全の準備を整えてくださいました。

また、今回の事業が成功裏に終了できた背景には、赤尾事務局長や伊藤事務局員による迅速な事務処理対応、原田SC普及委員からの貴重なアドバイス、さらに公益社団法人 東京都山岳連盟および東久留米山岳連名の多大な協力があったことをここに付け加えさせていただきます。

当日は安全管理体制の徹底のもと、全体の運営を円滑に遂行いたしました。本事業を通じて、地域におけるスポーツクライミングの認知拡大と教育的活用への可能性が大いに感じられました。今後もこうした取り組みを通じ、青少年の健全な育成とスポーツ振興に貢献してまいります。

（ＳＣ普及委員会委員長　栗田季慎子）

2025年度山岳レスキュー講習会（無積雪期・西部地区）報告

遭難対策委員長　服巻辰則

2024年6月20日（金）～22日（日）に富山県立山町の国立登山研修所にて、山岳レスキュー講習会（無雪期・西部地区）を開催した。昨年に引き続き6月の開催となった。今年は、屋外の人口岩場や体育館は利用できたが、研修所の施設改修工事の都合で宿泊室等の一部の施設は引き続き利用できないため宿泊や一部の講習は近くの富山県山野スポーツセンターを利用した。北陸地方は梅雨入りしていたが梅雨の中休みにあたり、三日間とも好天に恵まれた講習となった。

今年の講習は、従来のクラス構成に加え、岩場のセルフレスキューで使用するロープワークの基礎を徹底的に学ぶクラス２を新設した。

講習会参加者数は、クラス１（受講生７名）、クラス２（受講生２名）、クラス３（受講生８名）、講師・スタッフ等（11名）の計28名となった。この他、クライミングレスキューシミュレーショを主に行うクラス４も設定していたが、応募者が少なく催行中止とした。

クラス１は、登山医科学委員会の協力を得て、ファーストエイドを中心とした講習を行い、初期評価から応急処置を学び、搬送やビバークの判断、実践まで広く学ぶコースとなっている。

クラス２は、岩場におけるセルフレスキューで使用する技術についてロープワークを中心に技術やギアの特性を理解できるように講習し、介助懸垂下降を習得目標とした。

クラス３は、リーダーレスキュー技術の習得を目指し、各技術の習得からシステム全体の習熟を行い、最後はシミュレーション実習を行なった。

感想（クラス１・東京都　木村俊介）

初めてＪＭＳＣＡの講習に参加しました。

視覚障害者と山を歩く会で活動する中、「いざという時に備えたい」との思いが強まり、実践的に学べるこの機会を選びました。講習では、怪我や病気に加え、危険生物への対応など幅広いリスクに触れられ、どれも現場に即した内容でした。外科医と国際山岳看護師という頼もしい講師陣から、実体験を交えた具体的な話を聞けたことも、大きな学びでした。最終日の総合シミュレーションでは、緊張感のある中で考え、動く経験ができ、大変有意義でした。今回得た知識と技術を、今後にしっかり活かしていきたいです。

感想（クラス２・埼玉県　橋本昭子）

今回の講習会は山岳会の先輩に勧められ受講しました。山岳会に入会する前も様々な講習会に参加してきましたがセルフレスキューに特化した講習会は初めてでした。２泊３日の日程で繰り返し練習したことで一連の技術のひとつひとつの動作の意味を理解することができました。今回は参加者が少人数だったので個々に対応してくださり、最終日は自分の不安な技術をリクエストして実施することができました。今回学んだことがいざという時に自然と行動に出るよう今後もこのような講習会に参加していきたいと思います。また宿泊ならではの夜の情報交換会もほかのクラスの受講生と交流したり講師陣と語らったりととても有意義な時間でした。

感想（クラス３・新潟県　笠原大地）

今回の講習会を終えて感じたのは、引き出しが増えて成長できた、ということでした。私の職業は消防士で、管轄は山間部もあり山岳救助事案が多いことから受講させていただきました。普段は整った装備のもと、部隊で活動するため、本講習会のように救助のための資器材もマンパワーも劣勢の中活動するということはあまり経験がなく、消防の現場とは少し違いますが、その分非常にいい経験になりました。またクライミングで使用する資器材や結び方も勉強になり、理解が深まりました。

講師の方々も非常に丁寧に教えてくれるため、クライミング初心者の方でも気軽に受講できると思います。また宿泊施設の料理もおいしく過ごしやすかったためさらに有意義な講習会になったと感じました。

なお、本事業は、日本スポーツ振興センターのスポーツ振興くじ助成を受けて開催された。

令和７年度全国指導委員長会議及び スポーツクライミング代表者連絡会議（SC合同）報告

開催日　５月31日（土）６月１日（日）
場　所　埼玉県伊奈町　県民活動総合センター
参加者　５／31　68名（対面31名＋Web37名）
　　６／１　55名（対面30名＋Web25名）

令和７年度全国指導委員長会議・スポーツクライミング代表者会議が埼玉県の県民活動総合センターで実施されました。山岳、スポーツクライミング共に指導委員会は首都圏の常任委員のみ会場にて集合形式で参加。各地からはWEB参加と会場参加のハイブリッド開催にて実施されました。

また昨年同様、山岳とスポーツクライミングの運営は兼任している都道府県も多いこともあり、山岳の指導委員長会議の後にスポーツクライミング代表者会議も併せて実施となりました。

冒頭、担当理事挨拶を副会長の古賀様よりいただき…
• 登山遭難や無謀登山の問題、学校現場での登山指導者育成の必要性を指摘。　• 安全登山の普及と指導者育成への協力を呼びかけられました。

＊山岳、スポーツクライミングそれぞれの昨年度の事業報告、委員会のメンバー紹介と役割分担、本年度の事業計画の説明とそれぞれの主任検定員の状況が説明されました。

＊JSPOより学校の部活の外部委託がすすめられておりますが、クラブ活動移行に伴う法的リスク懸念されること、外部指導員としての関与に高いハードルあると問題視されました。

＊現在JMSCA傘下以外でコーチ資格が取りづらい点も問題視しておりますが、都道府県の養成講習会の対応も議論されました。また、コーチ資格と夏山リーダーの違いについて質問があり、夏山リーダーはすべての登山者対象、基本的に夏山の縦走等のリーダー育成であると説明されました。

＊スポーツクライミング代表者会議が引き続き行われ
令和７年度 事業計画
・主要事業：コーチ講習会（１～３）、主任検定員講習、更新研修、教材作成など。・養成講習会の実施種別や手順が説明されました。・今年度予定：コーチ１講習は５府県（オンライン１日＋集合２日）、コーチ２講習は２府県（集合３日＋オンライン１日）。・主任検定員講習は神奈川、京都で予定。

コーチ資格取得のメリット・プレゼンス向上の為、各都道府県に設置されている公共施設で、利用講習等が必要な場合、コーチ資格保有者が講習免除で利用できるような働きかけ・施設管理者との良好な関係構築等をＰＦの皆様にお願いしたい。

・公認スポーツ指導者等表彰
・JSPO第２号表彰（優秀選手を育てたコーチ）を各ＰＦから推薦予定が報告されました。

＊今回、瀬田工業の瀬田さんをWEBにてお招きして。日山協山岳共済会（山岳保険）のＱ＆Ａを実施いたしましたが、予定時間の30分が90分となり各県・山岳会の悩みや、共済会・保険の加入促進に関する取り組みについて活発な意見交換が行われました。

＊令和8（2026）年1月JMSCA指導者表彰対象者の報告。
岩手県　土井　祐之　16年
愛知県　木田　光彦　23年
兵庫県　西村　良信　16年

対象者はコーチ資格取得から15年以上で都道府県岳連、JMSCAでの貢献が対象となります。

日本スポーツ協会の共通資格制度上の事項もあり、今後も山岳、スポーツクライミング共にそれぞれの指導委員会の活動を共有し、推進していくことになります。

＊2026年度 指導委員長会議開催予定
2026年５月30日、５月31日

記：山岳指導委員長　野村
スポーツクライミング指導委員長　藤江

Enjoy Climbing!

Enjoy Alpine Climbing! 連載④

── アルパインクライマーとしての成長 ──

鈴木 雄大

次のピッチは主に雪壁だったが、最後に3mほど垂直の雪氷がでてきた。ここまで散々注意深くプロテクションを探しながら登ってきたが、どうしても20mはランナウトしてしまう。何もないよりはと、ピトンを叩き込むが、半分しか入らない。R/Xのグレードはここにつく。仕方なしにスリングをタイオフし、覚悟を決めて不安定な垂直の雪氷を乗り超え、再び同時登攀で合計120mほど高度を稼いだ。 そしてリードをKeisukeに交代。遠目には簡単に駆け上がれそうに見えていた雪のセクションも殆どがサラサラのシュガースノーで、掘り出した岩などを手掛かりに進んでいく。M５ほどのミックスなどをこなしながら、順調に高度を稼ぎ、動き続けた。 その後リードも２巡目に入り、同時登攀と隔時登攀を上手く使い分けながら、情報のない未知の壁にリズミカルにロープを伸ばしていく。いや、実際は5000mを超える高度の影響や、一向に進まない除雪作業にビレイヤーは待ちくたびれているだろうけど、登っている本人達は時間を忘れてクライミングにのめり込んでいた。 最後は彗介が長い同時登攀の末、セラックを掻い潜って狭い稜線の上へと導いてくれた。当然ここには全ピッチの詳細を書ききれないが、ルート全体の下部半分にも満たない南壁の全ピッチが、ユニークかつ厳しく、最高に充実の登攀であった。ロープスケールで13～15ピッチ分の高度を稼ぎ、これで技術的な核心は全て足元にしたぞと内心喜んでいたが、この下部岩壁はルート全体の単なる前菜に過ぎなかったようだ。日没過ぎに４分の１ほどが宙に浮いたテントに潜り込み、足と頭が谷に落ちていたが、疲れもあってそれなりに眠ることができた。

登攀２日目、ここからは内容がガラリと変わり、傾斜の強いリッジクライミングとなる。昨年のパキスタン・ガンバルゾムでも経験したが、この50°～70°の未踏リッジというのは、壁と違って下から先の見通しが立たないので、大変に厄介だ。加えて、傾斜がない分、下部で登ってきた壁よりも更にシュガースノーがこんもりと溜まっていて、登攀スピードが一向に上がらないのだ。僕らが持っていた唯一とも言える情報であったBCで撮影した写真も、複雑を極めるマッシュルームの連続には殆ど役に立たず、登っては立ち止まり、修正

奇跡的に見つけた半洞窟で２回目のビバーク

し、の連続で冒険的なルートファインディングをこなしていった。 ハイライトはこの日の夕方前だ。僕が２つの神秘的な氷のトンネルを潜り抜け、岩のクライミングで稜線を縫うように進んだ所で登攀不可能なスラブに阻まれた所、８m程反対側の斜面に降りてピッチを切ると、何とか手掛かりになりそうな雪の急斜面に手が届いた。彗介が代わってロープ一杯のトラバースで望みを繋げた。そしてその少し先には、奇跡的とも言える氷の半洞窟があり、ちょうど日没前にテントを張ることができた。まるで僕らがこの未踏のリッジを登るために用意されたのかと思うほど、幸運かつ重要な洞窟だった。結局、この日は丸一日かけて６ピッチを伸ばすのが限界だったが、ゆっくりと横になって疲れをとれたのが大きかった。

登攀３日目、今日中に複雑極まりない南スパーを抜けて南東稜に合流しないと、食糧や体力的にも先が思いやられる。前日の気の遠くなるような時間の掛かり方から、適度な緊張の中、行動を開始する。彗介の長いピッチからスタート。そろそろ安全マージンの感覚は大分麻痺してきたが、際どいトラバースなど２ピッチを快調に進め、美しい氷の穴でのビレイには感動した。3、４ピッチ目はOtsuboが担当。 見た目はサクッと登れそうな雪壁なのだが、いざ触ってみると全く手掛かりにならない70°のシュガースノー。息切れの中、時間をかけて粘り強くラインを繋いでくれた。こういうのが一番辛い。そして緊張感の途切れぬルートファインディングの連続。次のピッチは、下から睨んでいると右回りで巻いていくのがスムーズそうに見えていたが、実際行ってみると悪そうに見えたので、咄嗟の判断で左から直上。傾斜は80°以上に感じられたが、雪質が硬く、スクリューもたまに効いたので順調に伸ばせた。最後は柔らかい氷のトンネルをこじ開け、再び稜線の反

対側へ。その後もシュガースノーに苦しめられ、時間をとられつつも最低限の目標であった南東稜に合流。少しの夜間行動となったが、ギリギリでリスク許容度内と言えるセラックの真下が唯一のビバーク地だったので、仕方なくここで寝ることとした。

登攀４日目。ここからは傾斜も緩くなるので、同時登攀でグイグイと距離を稼ぎたい所だったが、むしろ全日程を通じて１番厳しい日となった。 まずは朝一のマッシュルームを越すのに手と足の雪氷が同時に崩れて５メートル程フォールする始末。僕は今まで国内外の冬壁で１度も落ちたことがなかったが、全く前兆もなく手足の雪氷が４つとも崩れたのだ。これはショッキングだった。簡単には登らせてもらえない。情けで打ったスクリューがなんとか持ち堪えてくれた。

気持ちを入れ替え、次のピッチ。稜線側壁の脆い岩壁にカムやナッツをきめながら、巨大セラックの真下をトラバース。本来こんな所を通りたくないのは当然だが、ここまで来たら突き進んでしまわないと、むしろ安全圏から遠のいていく。セラックの下に岩が露出していたのがラッキーだった。ところどころＶ級程度の動きをしながら、脆い岩を強引に進む。これ程長く未踏のリッジを進んできてしまったのだから、山頂を踏んで、反対側へ下降しなければ、見通しのつく退路は存在しない。半ば脱出行のようになってきた。

栃木県山岳･スポーツクライミング連盟自然保護委員会のSDGsな活動

栃木県には２つの大きな山域があります。日光山系と那須山系です。その２つの山域で年１回づつ自然保護委員会が中心となって保護活動をしています。

まず、日光山系ですが７月の第一日曜日に「日光清掃登山」を開催しています。今年50回目を迎えます。それに合わせ、コロナ禍で中止していた前夜祭を復活させミニ講演を開催します。久しぶりに各会員との懇親を楽しみにしています。また今年は、1934年の「日光国立公園」の指定から90周年を迎えることから、環境省との連携イベントとして開催されます。

当日は日光湯元ビジターセンター広場に集合、開会式の後、各会各自それぞれの山域に分かれて活動します。温泉の優待やロープウェイの割引など地元の方々の協力により、毎年200名前後の参加者を迎えます。活動当初は、ガラス瓶や缶詰類が多く、昔埋められたものが露出していてそれを掘り出しての活動でした。現在は登山者のマナーもよくなり、大きなゴミはなくなりました。登山道整備や草刈りなど、会ごとに作業していただいていますが、山域が広すぎてなかなか手が回りません。外来種の除去など、まだ課題は多いです。

そして、那須山系は９月の第一日曜日、「那須クリーンキャンペーン」として45回目を迎えます。昨年は荒天のため中止となりました。那須もまた毎年100名以上の参加者を数え、活発に活動しています。峰の茶屋跡への登山口に集合して開会式を開きます。那須山系もゴミは少ないのですが、岩場が多いため登山道の整備が主となります。

栃木県の山の大きな問題はトイレがないことです。日光の男体山、白根山にも那須の山々にもありません。白根山や峰の茶屋跡に避難小屋はあるのですが、トイレがありません。特に那須は子どもたちが多く登ってきます。子どもたちはトイレがないと大変です。だいぶ前から働きかけているのですが、未だ実現できません。

自然災害が多発し、ケータイトイレが普及し一般の方々にも認知されるようになりました。全国的にも、山にトイレの設置ではなく、ケータイトイレブースの設置が主流になっています。今年の日光清掃登山及び那須クリーンキャンペーン時には、栃木県環境課よりモバイルトイレを無料で提供していただき、受付時に無料配布予定です。トイレ問題は早急に解決したいことではありますが、行政や地元の理解や協力が不可欠です。自然保護のためにも発信し続けたいと思います。

栃木県山岳・スポーツクライミング連盟自然保護委員長
速水敬子

日光清掃登山時の草刈活動（2024年）

那須クリーンキャンペーン受付（2023年）

那須岳登山道ロープ張り直し作業（2023年）

JMSCA

令和７年度 第３回 理事会報告

○**日　時**：令和７年６月５日（木）
13：00－17：55
○**場　所**：JSOSビル３Ｆ会議室４及びZoom
○**出席者**：蛭田会長、古賀・吉田各副会長、小野寺専務理事、赤尾事務局長、野村・町田常務理事、小髙・栗田（途中から参加）・小田部・佐藤・島田・中島・中橋・西谷・畑中・望月・安井各理事　以上19名
佐久間・古屋監事　以上２名
○欠席：杉本・濱田・樋口・平田各理事
以上４名

１．開　会

２．蛭田会長からの挨拶

今回は、総会直前で役員の改選を控えた理事会となりますが、よろしくお願いします。

３．会議成立状況報告

理事数　開始時23名中18名出席（定款第33条、定足数＝12名（１／２超）
監事数　２名出席

４．議長選出

蛭田会長が議長を務める。（定款第32条）

５．議事録署名人

会長及び監事（定款第34条）

６．議　題（注. 審議順に記載）

議案第１号　議事録の承認について（事前送付済）

令和７年度第２回理事会議事録について

理事会終了後に配布され、異議なく承認されている。

議案第２号　令和６年度総括・事業報告及び決算報告案について

小野寺専務理事が、前回から個々の事業について一部変更追記要求があったこと、赤尾事務局長が決算概要、古屋監事が、監査報告結果、監査所見を伝えた。その後、以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成18名

議案第３号　基本財産の処分について（案）について

赤尾事務局長が、前回理事会時に指摘のあった部分は、”処分“という表現が適切という顧問弁護士からの助言を文書に反映したことを伝え、以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成18名

議案第４号　小野寺専務理事の退職金支給に関する取扱いについて

基金に100万円以上拠出していただくことを条件に、全額規程通り支給するという案が提案され、以下のように承認され、総会では、報告とすることになった。

反対０名、棄権０名、賛成18名

議案第５号　正会員の入退会の承認について

小野寺専務理事が、香川、山形、宮城、島根、高知、新潟の正会員の入退会届の報告がされ、以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成18名

議案第６号　次期役員選考、役職関連説明会等について

蛭田会長が、６月22日の総会後の理事会で、代表理事をスムーズに決定するために、６月12日（木）PM７：00から、次期役員候補者によるZoom会議設定の提案がされ、以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成18名

議案第７号　2027宮崎国スポリハーサル大会について

町田常務理事が配布資料を基に、令和９年７月３日から４日で実施することを説明し、異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成18名

議案第８号　公認大会規程の改定について

栗田理事が、改定案の説明をし、審判長の指名の部分で、”本協会技術委員会と協議の上決定する“という文面に変更し、その他の変更部分を含めて以下のように異議なく承認された。

反対０名、棄権０名、賛成19名

議案第９号　パラクライミング協会との関係について

町田SC部長が、パラクライミング協会から、（1）JMSCAのガバナンスコードを参考にしたいこと（2）JMSCA加盟団体の協力を得たい旨の要望がでており、現行覚書に“パラリンピック”という文言が加わる案を説明した。以下のように、異議なく承認された。総会時には、口頭で説明する。

反対０名、棄権０名、賛成19名

議案第10号　UIAA委員会の設置について

古賀副会長が、標記委員会の設置を提案したが、継続審議ということになった。

議案第11号　定款上の業務執行理事の人数について

古賀副会長が、役員選考規程の文言に合わせて、“ただし、業務執行理事は、理事の半数を超えてはならない“という文言を、定款に挿入することを提案したが、運用上このままでも対応できることから、定款変更は見送られた。

７．報　告

報告第１号　月次報告、キャッシュフロー

赤尾事務局長が、５月末時点のキャッシュフロー状況の説明をした。

報告第２号　財政再建計画について

望月理事が画面に表示し、概要の説明をした。

報告第３号　山岳共済会令和６年度決算、令和７年度予算案

小野寺専務理事が、配布資料を基に説明した。

報告第４号　委員会常任委員について

今回は申請なし。

報告第５号　港区クライミングオープンセレモニー覚書について

栗田理事が状況を説明した。

報告第６号　業務執行理事の職務報告について

各業務執行理事が事前配布資料をもとに当内容を説明した。

報告第７号　UAAA総会について

JMSCAの役員は参加しない。神﨑顧問が出席予定。

報告第８号　公認大会の開催の承認について

スポーツクライミングいわてカップ2025、ファインテン・マムートカップ2025、岸和田ＣＡＮＣＡＮカップ2025が公認大会として承認された。

８．その他

＊アンチドーピング研修は、オンライン中心となり費用削減が見込まれる。
＊赤尾事務局長から、委員会と事務局の業務分担で、改善可能性のある項目を一覧表で紹介した。発生費用は、各委員会に直接課金するようにすべきと監事からの助言があった。
＊領収書がないものの精算方法について、どう対応するのか、事務局から、後日、理事および、委員会に伝達予定。

以上

令和７年６月５日　　記録　赤尾浩一

寄贈図書

（公財）健康・体力づくり事業財団	「健康づくり」No. 566	会　報	やまびこ山想会	「やまびこ」第217号、218号	会　報
㈱日本運動具新聞社	「スポーツ産業新報」第2471号、第2472号、第2473号	新　聞	（一財）日本防火・防災協会	「地域防災」(2025-6 No.62)	情報誌
日本山岳文化学会	「山岳文化」2025年 第26号	会　報	おいらく山岳会	「山行手帖」No.787.'24. 7	会　報
㈱ネイチュアエンタープライズ	「岳人」７月号 No.937	情報誌	東京野歩路会	「山嶺」Vol.102 No.1144	会　報
日本バイアスロン連盟	冊子「バイアスロンヒストリー黎明編」	寄贈本	長野県山岳協会	「やまなみ」No.257	会　報
兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第696号	会　報	（公社）日本山岳会	「山」2025年（令和７年）６月号 No.961	会　報
㈱山と渓谷社	「山と渓谷」７月号	月刊誌	中華民国山岳協会	「中華山岳」季刊 300	会　報
東京新聞出版部	山岳救助に役立つ「図解 山岳救助技術」	寄贈本			

かすみちゃんのハイキング日記」

表紙のことば

関西クライマーの聖地「雪彦山」

兵庫県姫路市の北27㎞に位置する雪彦山（915 m）は、英彦山・弥彦山と共に日本三彦山と称されており、「日本三彦山サミット」なるイベントも開催され、三彦山登頂を目指す登山者もいるようです。

昭和初期に藤木九三氏らＲＣＣにより開発された岩場は、関西の有数の岩登りゲレンデで知られ、不行岳、地蔵岳の岩壁は圧巻で、クライマーのあこがれとなっています。

登山道も整備され、ハイカーにも人気があり、毎年５月に麓の賀野神社で山開きが行われ、登山者の安全祈願が行われます。

兵庫県山岳連盟はりま支部を中心とした「雪彦山遭難対策協議会」が組織され、遭難対策、救助活動に寄与しています。

兵庫県山岳連盟　副会長　伊藤一雄

編集後記

JMSCA事務局の皆さまと御岳山へハイキングに行ってきました。天候にも恵まれ、自然の中でのびのびと交流を深めることができ、普段とは違ったかたちで貴重な時間を過ごしました。

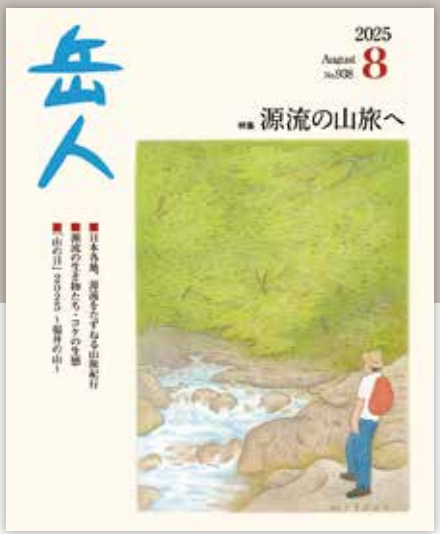
令和６年の山岳遭難の概況が発表されました。全国の発生件数は2,946件で、前年より180件減少しています。都道府県別では長野県が最も多く321件、原因別では「道迷い」が30.4％と最多で、「転倒」「滑落」が続きます。年齢別では40歳以上が全体の79.8％を占めています。詳細は警察庁のホームページをご覧ください。

（松本光顕）

登山月報　第 676 号

定　価　110 円（送料別）
予約年間　3,000 円（送料共）
（毎月 1 回 15 日発行）
発行日　令和 7 年 7 月15日
発行者　東京都新宿区霞ヶ丘町４番２号
Japan Sport Olympic Square 905
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会
電　話　03－5843－1631
ＦＡＸ　03－5843－1635

山岳雑誌
岳人（がくじん）
山と人、時代をつなぐ「岳人」



8月号販売中
【特集】源流の山旅へ
モンベルのウェブサイト
全国のモンベルストアや書店にて販売中！
毎月15日発売　価格1,100円（税込）

▶年間購読が断然おトクです！
年間購読通常特典　購読割引　送料無料　限定品プレゼント
さらに　モンベルクラブ会員さまには　モンベルポイント 5,000P プレゼント！
モンベルクラブ会員さまで現在購読中の方は、次回継続時に5,000Pをプレゼントします。

年間購読特典
岳人オリジナル手ぬぐい

岳人の表紙絵を描く中村みつを氏のイラストを使用！
限定デザイン
岳人カード
全国2,000ヵ所以上でご優待！

全国の温泉や山小屋など提携施設でさまざまなご優待が受けられるカードです。

年間購読のお申し込みはこちらから！
https://www.gakujin.jp/
全国のモンベルストアでも受付中！
お問い合わせ　モンベルポスト
フリーコール 0120-982-682／TEL 06-6538-5797
※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

ＳＤＧｓで、未来をつなぐ

三井住友海上は、安心と安全の提供を通じて、持続可能な社会の実現に取り組みます

SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS

SDGs（Sustainable Development Goals）とは

2015年の国連サミットで採択された「持続可能な開発のための2030アジェンダ」に掲げられた包括的で持続可能な社会の構築を目指す「持続可能な開発目標」のことです。

持続可能な地球環境	
関連する主なSDGs	主な取組
	・再生可能エネルギーの普及支援 ・自然災害リスクモデルにもとづくコンサルティング

安心して暮らせる社会	
関連する主なSDGs	主な取組
	・健康づくりの支援 ・先進技術を活用した利便性の高いお客さま対応

活力のある経済活動	
関連する主なSDGs	主な取組
	・次世代モビリティ社会への対応（自動運転車等） ・災害に強いまちづくりの支援

立ちどまらない保険。

MS&AD 三井住友海上

三井住友海上は、レジリエントでサステナブルな社会※をめざします。

※外部環境にしなやかに対応する、持続可能な社会

東商アソシエート株式会社　www.climbing-tosho.com　Tosho Associate

日山協山岳共済会のご案内

安全登山は登山者の努め、山岳保険は義務。

ご自身のために、ご家族のために。

日山協山岳共済会とは、

日山協山岳共済会とは公益社団法人日本山岳・スポーツクライミング協会（JMSCA）とアライアンスを組み、安全登山の指導・普及を図り、山や自然が好きな人たちのための互助と自立を目指す仲間の集まりです。山岳共済会は、日本の山岳遭難・捜索保険の草分けで、5万人の会員を持つ最大級の山岳共済です。年齢・既往症に関係なくどなたでも入会できます。

2023年 山岳遭難の概況

警察庁生活安全局生活安全企画課
（2024年6月13日）

発生件数	3,126件	（前年対比 111件増）
遭難者数	3,568人	（前年対比 62人増）
死者・行方不明者	335人	（前年対比 8人増）

JMSCA

2025年版
日山協山岳共済会のしおり

WEBからもお申込みいただけます（www.sangakukyousai.jp）